

[その他]

児童の主体性を育てる学校行事の取組

－ 自発的な運動会計画集団＝「運動会プロジェクトチーム」の取組を通して－

土屋 雅朗*

1 はじめに

今年度（平成18年度）が始まって間もないある日、担任している学級の児童からこんな言葉をかけられた。「先生、運動会の興味走は、今年もおもしろい種目を考えてね。」「応援団って何人がなれるんだったっけ。」まだ、1か月以上前にもかかわらず、運動会を楽しみにしている児童の様子がこの言葉からうかがえた。しかし、これらの児童の発言はすべて「受け身」の立場のものであった。このことから、運動会に向けて、児童の興味・関心は非常に高いものの、主体的な参加意欲は薄く、「あらかじめ、定められた路線に沿って参加する。」「ただなんとなく参加する。」といった意識が強いことがうかがえた。

当校は、児童数318名、13学級の中規模校である。田園地帯に立地し、保護者、地域住民の学校教育への理解もあつく、様々な意味で良い教育環境にあると言ってよい。この地域の良さを生かして、さらに児童の主体性を育てることが、学校課題とされてきた。そのような中、校長が、年度当初に次のように職員に投げかけた。「学校は子どものためにある。」「したがって、学校は教師の都合のために運営されるべきではない。子どもに沿いなさい。子どもに沿った視点で、必要なことから変えていくべきだ。」と。このことは、言ってみれば当然のことであるが、またその一方で、その後の教育活動の構想の視点を再認識させられることになる。特別活動主任であり、体育主任でもある筆者は、この校長の方針と前述した児童の実態とを踏まえ、新たな視点で今年度の運動会を構想しようと考えた。

小学校学習指導要領第4章の特別活動においては、その目標が、次のように示されている。「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。」（下線筆者）

このような背景のもと、運動会を児童自身が『創っていく』活動を通して、児童に自主的、実践的な態度が育ち、職員も含めて、主体的に運動会にかかわっていけるようになることを考えた。そこで、児童による運動会計画集団を結成し、児童自ら運動会を計画・立案、運営する過程を通して、自己活動力・自己決定力及び実践的態度（実践力）を育むこととした。

2 研究の目的

「学校」の主人公は、児童である。学校は、児童のために存在するのであり、教師の都合を主体に運営されるべきものではない。ところが、運動会について、種目や日程等その内容のほとんどを、教師主導で決定している現状がある。これでは、児童の参加意欲は高まらず、「ただなんとなく参加する」といった意識につながりかねない。このような現状を改善することを目的として、運動会において、児童が主体的に取り組めるようなシステムづくりを提案する。

3 研究の方法

自らが運動会を企画・運営することによって、児童は、主体的に、意欲をもち、嬉々として運動会に参加することができると考え、そのためのシステムを構築した。それが、「運動会プロジェクトチーム」の結成である。この「運動会プロジェクトチーム」の活動活性化を図り、その成果を、プロジェクトへの参加児童、全校児童、職員の取組、また、保護者の反応などを通して検証する。

* 三条市立栄中央小学校

4 実践の概要

(1) 職員の意識の変革

運動会のような大きい学校行事を行う場合、職員会議で担当者から原案が提示され、それを検討し、ある程度の流れが決まっていくのが一般的である。前述の校長指示を受け、今年度の運動会は、そのねらい、期日、構想のみを体育主任である筆者が提案し、次のように職員に語りかけた。『子どもたちが、夢をもって嬉々として学ぶ』姿を追求し、[児童が自ら考え、工夫して実行できる]よう、詳細（種目・プログラム等）については、『運動会プロジェクトチーム』を立ち上げ、児童の考えを可能な限り聞き入れ、児童とともに深めていきたいと考えています。』と。ここで、運動会の大きな枠組みを教師が設定しつつも、内容は児童に委ねてみようという、教師の運動会に対する新たな姿勢が確認された。職員の意識を変える第一歩がスタートした瞬間であった。

「子どもたちが、夢をもって嬉々として学ぶ」姿、すなわち自己活動力・自己決定力及び実践的態度（実践力）を身に付けた姿を、次のように設定した。

【自己活動力】 ・運動会プロジェクト会議に参加し、「こんな運動会にしたい。」という自分の意見を発言している。 ・人（教師）に頼らずに、自ら考え、それを行動に移している。など 【自己決定力】 ・運動会種目を自分たちで考えている。また、自分で選んで種目（興味走）に出場する。 ・徒競走の距離を、自己選択・自己決定している。など 【実践力】 ・運動会プロジェクト会議で決定したことに沿って、仲間と協力しながら準備を進めている。など

(2) プロジェクト活動の実際

① 運動会プロジェクトチーム会議を児童の手で

まずは、チームのメンバーの募集である。意欲をもっている児童なら、学年等にかかわらず、何人でもよいというスタンスで参加者を募った。運動会実施予定日の約1か月前から、毎日昼休みの約30分間を会議に充てた。1回目の参加人数は38人、2回目は58人、3回目は53人、4回目は37人、5回目は46人の参加者で話し合いを進めた。ほぼ同じ児童が継続して8回まで参加した。進行は、最初は体育部の教師が務め、徐々に児童のリーダーに委ねていった。体育部の教師を中心に、毎回2人以上の教師が参加し、適宜児童の意見に対して助言を行ったり、会議の一参加者として発言したりした。第8回目の会議までは、「こんな運動会にしたい」といった希望や意見を出し合い、児童同士で話し合いを深め、できそうなものとそうでないものとを、児童たち自身が取捨選択していった。はじめのうちは、自分の思いや考えがあるにもかかわらず、それをうまく表現できないで沈黙する場面が多くあった。しかし、回を重ねるにつれ、活発な意見交換ができるようになった。第1回目から第8回目までの会議の内容は、以下の通りである。これは、会議に参加できなかった児童や職員にその都度の内容を知らせるために、「運動会たより」として発行したものの中からの引用である。※文字囲は決定事項

「運動会たより 第1号」4月18日（火）に運動会プロジェクトチームを立ち上げました。プロジェクトチームのメンバーを全校児童に募ったところ、38人（2年生7人、3年生5人、4年生12人、6年生14人）が集まりました。そこで、運動会への思いや、考えを発表し合いました。出された意見は、次の通りです。 ・「超」障害物レースをやりたい。・50M走をやりたい。・おにごっこをやりたい。・しっぽ取りゲームをやりたい。 ・チャンス走は学年別ではなく、やりたいところにいきたい。・リレーをやりたい。・もりあがるから、ファンファーレをブラス部にやってもらいたい。・準備体操をやりたい。・お年より、お客さん、カメラ専用の席をつくりたい。・すもうをやりたい。・屋上に大きい風船（アドバルーン）をあげたい。・スローガンを目立たせたい。・低学年も応援団をやりたい。→低学年でも持てる小さめの旗を作ったらい。・チャンス走（内容）、徒競走（距離）を選びたい。・騎馬戦を低学年もやりたい。・カウントダウン表を作りたい。・先生方全員に去年のようにユニホームを着てもらいたい。（一部省略）
「運動会たより 第2号」 第2回運動会プロジェクトチーム話し合い（4月19日）の内容です。参加人数58人。 応援団について・4・5・6年生でやる。→低学年は声が小さいから。・1・2・3年生も応援団をやりたい。→楽しそうだから。おにごっこについて・無理だと思う。→全校人数が多いから。すもうについて・やめたほうがいい。→体の大きさの差があるから、小さい子がけがをしまうから。騎馬戦について・低学年はやめた方がいい。→かたぐるまができないから。しっぽとりゲームについて・やめた方がいい。→しっぽがないから。カウントダウン表について・作った方がいい。

→盛り上がるから。徒競走・チャンス走について・自分で選んで参加したい。→高学年でも50Mを走りたい人がいるかもしれないから。・選んで参加すると、1年生が6年生に勝てない。・1年生でも勝てるように工夫すればいい。応援席について・お年寄りの席を作った方がいい。→お年寄りが喜ぶから。・カメラ席はやめたほうがいい。→人数が多いから、後ろの人が困る。ファンファーレについて・あった方がいい。→盛り上がるから。風船（アドバルーン）について・大きい風船をあげるのはいやめた方がいい。→お金がかかるから。・小さい風船をたくさんあげればいい。（一部省略）

「運動会たより 第3号」 第3回運動会プロジェクトチーム話し合い（4月20日）の内容です。参加人数53人。
チャンス走について・先生に決めてもらうことには、反対。→この会自体の意味が無くなるから。チャンス走は自分たちで決める。風船について・小さい風船よりも大きい風船の方が目立つからいい。→賛成：小さいとひもが切れて飛んでいく。小さい風船がたくさんあるとひもが絡まる。切れると意味がない。→反対：小さい風船のほうが、色をいろいろ選べる。楽しくなってくる。応援団について・1・2・3年生も応援団をやってもいいと思う。楽しく応援ができる。・声は小さいかもしれないけれど、いい経験になるので賛成。・低学年の横に高学年がいてあげればいい。（一部省略）

「運動会たより 第4号」 第4回運動会プロジェクトチーム話し合い（4月21日）の内容です。参加人数37人。
応援団について・1・2・3年生も応援団をやりたい。・低学年の横に高学年がついてあげれば、できる。・それでも緊張して失敗してしまう恐れがある。・緊張したら高学年からなぐさめてもらう。・1年生は、運動会の経験がないので厳しい。2・3年生は一度経験しているので大丈夫ではないか。・4・5・6年生でも声が小さい人がいるし、2・3年生でも声が大きい人がいるから、入れてあげればいい。・運動会は楽しいものだから、1～6年で楽しくやりたい。・多数決で決めよう。9割賛成で「1～6年生で応援団を結成する。」風船（アドバルーン）について・風船をあげるかあげないか。・運動会と書けば、みんながわかるから、やった方がいい。学校がきれいに見えるし、お客さんもたくさん来る。風船は、あげる。・小さな風船がいい。・きれいかきれいじゃないかで風船を決めるほうがいい。きれいならば、お客さんがたくさん来てくれる。・意見がたくさん出たから多数決で決めたらどうですか。多数決：大きい風船13人 小さい風船21人 小さい風船をあげる。その他綱引きについては、今年度も行う。（一部省略）

「運動会たより 第5号」 第5回運動会プロジェクトチームでの話し合い（4月24日）の内容です。参加人数46人。
・先生方にユニフォームを着てもらいたい→来られた人が誰が先生かわからないから。先生方にユニフォームを着てもらう。・プラス部に盛り上がるからファンファーレをやってもらいたい。・賛成、盛り上がって楽しくなるから。プラス部にファンファーレをやってもらう。・聖火入場をやりたい。聖火入場を代表児童からやってもらう。・準備体操でみんなに見えるように前に出てやってもらう人が必要だ。代表児童が前に出て準備体操の手本を見せる。徒競走について細かく決める。・例えば、A 100M B 80M…などそういう感じで分けるやり方でいいですか。・コース別に距離を分けたほうがいい。・50M 80M 100M 200M ・40M 50M 80M 100M・1年生は小さいので、40Mなどの短い距離がいい。・40Mと50Mはあまりかわらないので変えた方がいい。・40M 80M 100M 150M又は200M 多数決で徒競走については、40M 80M 100M 150Mの距離を選択制で行う。（一部省略）

「運動会たより 第6号」 第6・7・8回運動会プロジェクトチーム話し合いの内容です。
チャンス走について・三つとも、中心になる種目を作ると良いのでは。・難易度をレベル別に設定したらどうか。A初級、B中級、C上級コースと設定したら。・一つの種目でも、その中で、簡単なものや、難しいものをいれればいい。・中心になる種目を考える。A：かり人競争 B：カードをめくりその内容（なわとび、じゃんけん、ボールつき、サッカーボールけり）でゴール。C：決められた障害物（ネットくぐり、平均台）スローガンについて・ガンバレ○○っ子・輝け○○っ子・燃えあがれ○○っ子・輝く瞬間は今だ！・気合いでがんばれ○○っ子・がんばれアミーゴ・フレフレ○○っ子 多数決の結果 今年度の大運動会スローガンは「光輝け○○っ子」に決定。（一部省略）

運動会たより第1号で見られるように、児童は、運動会に対して多岐にわたった願いや希望をもっていることが分かる。低学年からの率直で純粋な意見を、高学年が上手にまとめたり一緒に考えたりしながら、低学年児童を説得していく場面が数多く見受けられた。時には考えが対立するが、児童同士の話し合いの中で、徐々に一定の方向にまとまっていく。また、見に来てくれる人を意識するなど、相手の気持ちを考える一面もあった。文字圏で表したように、次々に、児童の話し合いの中から、運動会の方向が決定していった。このように、運動会プロジェクト会議では、教師に頼らずに、自らの考えで、「こんな運動会にしたい。」という自分の意見を発言したり、それを行動に移すための準備をしたりと、まさに「自己活動力」を発揮する姿が見られた。

② 話し合いから実行へ

この会議で決定したことを受け、必要な班（図1）を立ち上げて、具体的な活動を進めていった。ここでも児童の自発性を尊重した。これまでプロジェクト会議に参加していた児童の他に、新たに全校児童からの希望者を加え、それぞれ希

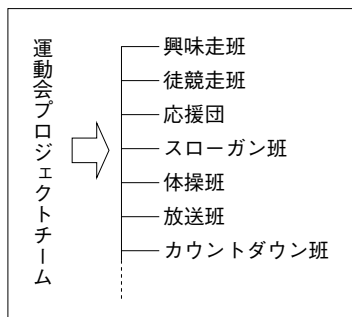


図1「運動会プロジェクトチーム」の発展

望の班に所属した。その班でリーダーシップをとる者、そのリーダーをフォローする者とが支え合い、新たに割り振られた各班担当教師の支援のもとに計画を実行していった。これが、プロジェクト会議での決定に沿った、児童たちの具体的「実践力」の発露の場となった。

(ア) 興味走班・徒競走班

興味走については、昨年度までは、教師が内容を決定し、児童に提示、練習、実行がされてきたが、プロジェクト会議で決定したように、三つの興味走の詳しい内容を、この班で決定していった。[A「めざせ！かりびと名人！」(借り人競争)、B「わくわく！どっきり！障害物レース」(障害物競走)、C「ペラペラめくってレッツゴー！」(借り物競走)]。ここでも、借り物は、「走ってきてぶつかっても痛くないように」と、玉入れの玉や柔らかいボールを選定したり、くじ引きの文字に振り仮名を付けたりするなど、低学年や相手を思いやる気持ちが現れていた。さらに、全校児童が自分の出場種目を決定するための説明会が、担当児童の手で行われた。徒競走について、児童は、全学年ばらばらで、その距離ごとに競技を行うか。また、1・2年、3・4年、5・6年で分け、その中で3コースの選択制にするかを考えた。結論は、後者のパターンでの実施となった。

この、興味走と徒競走への選択制の導入によって、児童自ら、自分が出る種目を選択・決定し、実行する場が設定された。このことは、児童一人一人の運動会への意欲の向上、そして「自己決定力」の育成につながった。

(イ) 応援団

1年生から6年生までの希望者が集まって組織された応援団は、活気とやる気のあるものとなった。ここでもやはり、高学年が、運動会初体験の1年生を優しく導いていく姿が見られた。また、応援席については学年順に配置される場合が通常であったが、今回児童の考えを尊重し、次のような思いで変更した。

応援席について、児童(6年生)は、異学年とも交流を図りたい。(低学年の面倒を見てやりたい。)という希望があり、はじめは、清掃班(たてわり班)ごとに並びたいと提案してきた。提案児童は、その後さらに深く考え、それでは、組も違うしゴチャゴチャしてしまうと考えた。そこで、話を聞いていくと、学年はひとまとまりに固定し、1年生から6年生まで規則的に並ぶのではなく、不規則的に並ぶ案が浮かんできた。そしてさらに、1年生は準備や整列に時間がかかるので、入場門にいちばん近い位置がよいということで、固定した。(運動会日より第16号より)

(ウ) スローガン班

スローガンは、昨年度までは当日のみのお披露目であったが、「せっかく作るのだから、もっと早めに掲示したい。」「そうすれば、みんな盛り上がってもらえる。」という児童の希望で、2週間前までに完成させ、校舎外壁(玄関上)に掲示することになった。何色の紙に何色の文字で書くと見栄えがするかなど、念入りに児童間の打合せがされ、2M×18Mの大きなスローガンが完成した。当日は、グラウンド正面上の校舎の外壁に掲示した。(写真1)

(エ) 体操班

体操班の仕事は、運動会当日の準備体操の、ダンスの内容の選定である。「やらされる準備運動」から、「自分たちで考える準備運動」への移行である。児童は、「自分たちで考えたのだから、しっかりやらなければ。」と、自分で「決める」ということは自分の「責任」につながるのだと実感した様子であった。またここでも、相手を思いやる気持ちが表れ、「お客さんにも踊ってもらえる、準備体操の内容を。」という観点も加わり、工夫・開発されていった。

(オ) 臨時的「てるてる坊主」作成班

運動会へ向けて取り組んでいる中、当日の降水確率が70パーセントで悪そうだという情報を得てきた児童がいた。そこで児童は、早速「てるてる坊主を作りたい。」と提案してきた。「どうせ作るなら大きい物を作りたい。」そんな願いから、巨大てるてる坊主(写真2)を作成した。それを児童玄関前に掲げ、全校児童が、それぞれの思いをメッセージとして書き込んでいった。



写真1 校舎外壁に設置した「スローガン」と「てるてる坊主」



写真2 巨大てるてる坊主

「晴れますように」「赤（白）勝て」等々。あっという間に“白い”てるてる坊主が、児童の思いが書き綴られた“カラフル”な色に染め上がった。

③ プロジェクトチーム活動の全体化

こうやって、班での活動が着々と進んでいく中、運動会2週間前の全校朝会時を利用して、それぞれの班長が全校児童に活動を紹介したり、協力を要請したりする場を設定した。各班長は、自分がやってきていることが全校児童に認知され、大きな自信をもつことになった。これにより、学校全体が、一気に運動会へ向けて盛り上がりつついった。また、今までどちらかという運動会への意欲の高まりが十分でなかった児童も、「何か自分にできることはないか。」「自分はどの種目にしようか。」と、運動会に向けた流れに加わっていった。運動会に向けての仕事を自分で考えたり、興味走や徒競走の出場種目や距離を自分で選んだりするという「自己決定力」を発揮する姿が、この[全体化]の場の設定により見られるようになった。

(3) 運動会当日の実際

既述の活動の集大成が運動会当日である。開会宣言から閉会宣言まで、すべてにおいて児童が主役の運動会が、晴天の中、開催された。開会式の運営を担当している児童は、緊張しながらも、その表情からは堂々とした自信を感じ取ることができた。選択制を取り入れた興味走については、ワクワクしながらプログラムを何度となく確認し、自分で決めた種目の予定時刻を確認している児童の姿があった。興味走の種目内容を考えた児童は、その後「私が考えた種目をみんなが楽しんでくれて、すごうれしかった。」と述べている。自ら進んで「放送班」に加入した2年生児童は、当日に向けて練習を積み、精一杯マイクに向かってアナウンスしていた。その、けなげで一生懸命な姿に、放送テントの周りの保護者からは、割れんばかりの、大きな拍手が沸き上がった。まさに、運動会プロジェクト会議を通して決定したことによって、仲間と協力しながら実践に移すという「実践力」を発揮する姿が至るところで展開された。

5 実践の成果と考察

(1) 児童の変容と保護者の反応

これは、運動会終了後、6年生児童が、運動会について書いた作文の一部である。

（略）一番すごいなあと考えたことは、2年生の子が進んでプロジェクトチームに来てくれたことです。（略）去年は先生が考えたことをただやるだけでした。けど今年は、「ぼくたち、私たちの運動会」になりました。先生達に考えてもらって「やってください。」って言われても、やる気があまりでないと思います。でも、全校のみんなが協力してやった運動会は、すごくやる気ができました。プロジェクトは、大変だったけど、そのおかげで、意見も前よりは言えるようになりました。私たちは、最後の運動会だけど、これからもずっと、この『私たちの運動会』のままだいいと思いました。（略）（下線筆者）

この作文から、運動会に対する思いの変化がうかがえる。「プロジェクトチームに来てくれた」という表現でも分かるように、この児童はプロジェクトチームの一員であることを意識していると同時に、最高学年の立場から、低学年児童が参加したことに喜びを感じている。しかも、自分がプロジェクトチームの一員であったことを誇りに思っていることから、今までの活動が自信につながっていることがうかがえる。

後日、全校児童を対象に、運動会についてのアンケートを実施した。（表1）「A運動会の練習や活動に、やる気いっぱいに参加できたか。」の質問については、95.2%の児童が、「Bあなたは、自分たちにできる活動を考え、工夫しようとしたか。」の質問については、82.8%の児童が、肯定的な自己評価をしていることが分かった。自分自身が考え、決め、選ぶ運動会を体験した児童は、前述の作文に見られるように、やり遂げたという達成感・充実感を得ることができた。

A 運動会の練習や活動に、やる気いっぱいに参加できたか。			
とてもよい	だいたいよい	もう少し	あまりよくない
217人 (68.2%)	86人 (27.0%)	13人 (4.1%)	2人 (0.6%)
肯定的 95.2%		否定的 4.6%	
B あなたは、自分たちにできる活動を考え、工夫しようとしたか。			
とてもよい	だいたいよい	もう少し	あまりよくない
135人 (42.5%)	128人 (40.3%)	48人 (15.1%)	7人 (2.2%)
肯定的 82.8%		否定的 17.3%	

対象者：全校児童318人

表1 運動会後の児童の意識調査

さらに、保護者から見た児童の意識の変化について、下記のようにアンケート調査を行った。

Q. お子さんの運動会に対する「思い」は、昨年までの運動会への「思い」と比べて、変化が感じられましたか。

は い	いいえ	無回答
225人 (85.6%)	31人 (11.8%)	7人 (2.7%)



対象者：2年生～6年生の子供をもつ保護者：のべ263人

Q. それは、どのような変化ですか。(抜粋)

- ・運動会についての話をすることは今までほとんどなかったのですが、よほど楽しく計画を立てたり、準備をしていたんだと思います。とてもそのことについての会話が多くなりました。また、当日は、絶対に晴れると確信している様子でした。
- ・学校の行事というより、自分たちの運動会というような積極性が見られました。
- ・今年は、前日に「運動会を楽しみにしてて!」と言っていました。自分たちで「作った」運動会を見に来て欲しいという気持ちがその一言だと、当日見に来て感じました。

このアンケートは、兄弟姉妹がいる家庭には、児童一人一人の様子について回答してもらった。運動会に対する思いについて、85.6%の保護者が、児童の何らかの変化を感じ取れたようだ。学校行事の在り方について、新しい観点を児童や保護者に与えることになった結果であろうと考える。

(2) 教師の変容

前述した第1回目の職員会議では、運動会の方向は定まったものの、「児童主体」の趣旨が十分に分からない職員も少なからずいた。しかし、この実践が進んでいく中で、教師自身が、児童の意欲の高まりや、沸き上がってくる児童の「パワー」を実感していくこととなった。そして、今までの児童への指示的な言動から、児童自身の自己決定、自己選択の場を促すといったような、支援の仕方の変化が生じてきた。教師が、発想を転換する姿が見えるようになったのである。運動会後の反省用紙に、ある教師は次のように書いている。「今まで、児童ができることまでをも教師が設定してあげていたことに反省させられた。そういった場や環境を整えてやれば、児童は立派にその責任を遂行することができる。今回の運動会の一連の活動を通して、児童の新たな一面を見ることができた。」と。

6 まとめと今後の課題

運動会において、児童が主体的に取り組めるシステムとして、「運動会プロジェクトチーム」の活動の有効性を、三つの力を発揮する児童の姿で述べた。そのシステムをまとめると、次の3点に集約される。

- ①児童全体から希望者を募る。[児童の意欲の喚起と、自然発生的な異年齢集団での活動]
- ②教師も児童と同じ立場でチームや班に加わる。[陰にまわった支援]
- ③チームや班の動きを全校に知らせる。[情報の提供と学校全体の活性化]

このようなシステムによる取組を通して、次のような主体性ある児童の姿が見られた。

- ・チームや班の活動に進んで参加し、自分の考えを積極的に述べる姿。
- ・チームや班からの提案を受け、自分が出場する興味走の種目を決めたり、徒競走の距離を選んだりする姿。
- ・仲間と協力しながら具体的な準備等の活動をしたり、意欲的に運動会当日の運営をしたりする姿。

これらは、「プロジェクトチーム」というシステムを運用したことによって生まれてきた、児童の【自己活動力】【自己決定力】【実践力】の現れであると考えられている。

これからの課題として、児童の自発的な活動及び、教師の効果的なかわりを支える「時間の確保」が挙げられる。例えば、校時表を工夫して、今回のような児童の主体的な活動を保証する時間を確保するなど、「ソフト（活動内容）」と「ハード（それを支える環境）」の両面から、本実践のような取組を実行できる学校の環境整備を、より一層工夫し、考えていきたい。そして、児童の学校生活の、「点」である学校行事から、「線」である日常の生活に、本研究で意図したことを広げていくことが、筆者自身のこれからの課題である。

運動会の閉会式で、ひとつの風船を飛ばした。その風船は、「自分たちで『創った』運動会」という、児童の夢で膨らんだもの。この風船が、児童の心の中にいくつも膨らむよう、今後の教育活動の糧としていく。

参考文献

- ・真島康秀 上越教育大学長期研修報告書「学ぶ者の論理に添う【総合学習】の教育的価値に関する研究」 2000
- ・文部省（現文部科学省） 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」 平成11年5月